てや北里柴三郎が第1回の受賞からもれたのも，そのころの日本の国力や科学界における地位からみれば，残念ながら当然といえるのではないだろうか。

その逆の例としてフォン・フリッシュらの受賞があげられよう。かれらの「個体的・社会的行動様式の組織と誘発に関する発見」(正式な授賞理由)は旧来の本能の概念に新たな光を投げかけ，その水準の高さも問題にすることはないと委員会は判断したが，この研究はノーベル賞がさだめる生理学または医学の領域に属すると判定することは困難であるとして，1962年の選考ではもれてしまった。しかし1973年に委員会はノーベル賞の規定を改変して，その解釈を拡大したことによって授賞の対象とした。これなどは明らかに研究の内容ではなく，学問にたいする社会的要請の変化が受賞につながったものといっていいだろう。

2009年8月の国際シンポジウム「北方圏の環境と文明」に参加するために来日したノーベル財団副理事長オキュスト Gunnar Öquist は，「ノーベル賞が高い評価を得てきた理由は『揺るがない選考基準』だ」，と毎日新聞(2009年9月4日号)にかたっているが，かならずしもそうとはいえないのはフリッシュの例にみられるとおりである。

バンティング Frederick Grant Banting (1891-1941)がインスリンの発見によって1923年に，マクラウド John James Richard MacLeod (1876-1935)とともにノーベル生理学医学賞を受賞した。バンティングのたっての望みによって，休暇中にかぎるという期限付きで，マクラウドは実験室と実験に使用する10頭のイヌを提供した。バンティングとともにこの実験室にたてこもって実験に汗を流したベスト Charles Herbert Best (1899-1978)は，ノーベル賞の選考にもれてしまった。受賞決定後バンティングはインスリン発見の功労を多として，ベストに賞金の半分をわかちあたえた。これには自らの弟子としてインスリンの発見にかかわったとして，マクラウドも賞金の半分をコリップにあたえるというおまけまでついた。マクラウドにたいしては「実験室とイヌの提供でせしめた賞」という非難をあびせるものもいた。一方，バンティングのその後の業績をみると，充実した設備をもった研究所を主宰し，研究費と協力者に何ひとつ不自由しなかったが，みるべき成果をあげていない。そこで「研究者として向いていない人が，生涯にただ一度幸運に出会ったとしか思えない」という酷評さえくわえられている。しかしさきのオキュストの「ノーベル賞は研究者の生涯に及ぶ貢献ではなく，真の発見に贈られる」という言にしたがえば，バンティングの受賞にたいしてくわえられた非難はあたらないといえるかもしれない。

バンティングの幸運といい，ベストの不運といい，科学者ばかりでなく，人間にはつねに運・不運がつきまとっていることを考えさせられる好例であるといえよう。

文　献

1) ウェイドN(丸山工作，林泉・訳)：ノーベル賞の決闘．岩波書店，東京，1984.
2) 矢野暢：ノーベル賞 二十世紀の普遍言語．中央公論社，東京，1988.
3) ズッカーマンH(金子務・監訳)：科学エリート：ノーベル賞受賞者の社会的考察．玉川大学出版部，東京，1980.
4) Medvei VC：The History of Clinical Endocrinology. Parthenon Publishing Group, New York, 1993.
5) 丸山工作：科学者の運，不運；インスリンの発見をめぐって．丸山工作編，ノーベル賞ゲーム：科学的発見の神話と実話．岩波書店，東京，1989.
6) 田沢健次郎：引き分けた脳ホルモンの解明競争：R・ギルマンとA・シャリー．科学朝日編，ノーベル賞の光と陰，朝日新聞社，東京，1981.
7) 松尾寿之：ストックホルムへの道：ギルマンとシャリーの先陣争い．丸山工作編，ノーベル賞ゲーム：科学的発見の神話と実話．岩波書店，東京，1989.

PROFILE：深瀬泰旦 *Fukase Yasuaki*

東京慈恵会医科大学卒業。小児科学とくに腎臓病学専攻。順天堂大学医学部医史学研究室において医史学専攻。日本医史学会理事，日本小児科学会名誉会員。著書に『天然痘根絶史：近代医学勃興期の人々』(思文閣出版)，『わが国はじめての牛痘種痘 橋林宗建』(出門堂)，『検査を築いた人々』(時空出版，共著)，編書に『東と西の医療文化』(思文閣出版，共編)，訳書に『シンガー・アンダーウッド 医学の歴史1～4』(朝倉書店，共訳)をはじめ医史学関係の論文多数。

連載

関係からみた子どものこころと育ち

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授

第21回（最終回）

成人にみられる「甘え」のアンビバレンスさまざま

最終回にあたって

これまで本連載では，子どもの心の育ちを，主に母子関係に焦点を当てながらみてきたが，そこで母子関係をむずかしくしている中心的な問題として「甘え」にまつわるアンビバレンスがあることを一貫して論じてきた。さまざまな事例をとおして，そのアンビバレンスが実際どのようなかたちで現れるかを示すとともに，それを治療のなかで取り上げることが，その後の治療経過そのものに大きな影響を及ぼすことをも明らかにしてきた。

最終回の本稿では，これまで取り上げてきた親子関係の問題が，成人になった際にどのようなかたちで再び問題として浮かび上がるかを述べる。なぜこのようなテーマを選んだかといえば，昨今，成人の発達障碍，とりわけ ADHD (attention deficit hyperactivity disorder，注意欠陥多動性障碍）やアスペルガー障碍などが何かと話題となっているが，子どもの発達障碍が脳障碍と短絡的に結びつけられて論じられることが多いなかで，それが成人例においても広がりつつあることを憂慮しているからである。子どもであろうと成人であろうと，ともに「関係」からみることで，対人関係の問題の所在を明らかにすることができるのではないかと思う。

さっそく，具体的な事例を取り上げてみよう。まずは職場の仲間や友人から対人関係の問題を指摘され，アスペルガー（障碍）[註] ではないかと言われて受診してきた2つの事例である。

アスペルガー障碍を疑われて相談にきた事例

U子：ある20歳代後半の水商売の女性は彼氏からアスペルガーではないかと言われて，ある精神科クリニックを受診し，そこで担当医もそれを疑い，筆者のもとに紹介されてきた。彼女の話では，職場の周りの人たちから，あなたは変わっている，あなたと話しているとイライラするなどといつも言われ，会う人みんなに結局最後は嫌われ別れてしまう。彼氏ともいつもけんかになるというのである。

生育歴を聞くと，乳幼児期から両親の不和が続き，DV (domestic violence，配偶者間暴力）に近い家庭環境であった。小学生時代から死にたいという思いを抱いていたが，学校でもずっといじめられていたらしい。

診察してみると，たしかにU子の対人的構えにはある特徴があ

註）自閉症と類似の特徴を有する発達障碍ではあるが，言語発達の遅れがないため，幼児期にはさほど問題とされることは少ない。成人になって初めて対人関係の問題で精神科を受診することが多いことから，精神医療の分野で話題となっている。いまや「アスペルガー障碍」という病名は世間一般にも急速に流布し，「アスペルガー」とか，さらには「アスペ」などと略してよばれるほどである。

小児看護，33(13)：1858-1862，2010.

ることに気づいた。表情に生気が乏しく，淡々とした話し方である。意欲に欠ける点もあったが，それよりも他者に対していつもある一定の距離をとることによって，深い交流を避けているのが印象に残った。それはU子のこれまでの生い立ちを考えれば当然だろうとも思われた。しかし，このようなU子の対人的構えは水商売をする際にはプラスにはたらいているようで，客にはとても人気があるという。過度に客に媚びることなく，どことなく影をもつ女性としてみられるからではないかと思われた。

筆者は，この人の対人的構えがどの程度固定的なものかをはかるために，冗談を交えて話しながら面接をすすめた。冗談に対する反応は予想に反して良好で，不自然さは感じなかったが，しだいに明らかになったのは，U子の対人的構えの背景には，他者に嫌われたくない，でも深い付き合いも怖いという思いが強くはたらいていることであった。「甘え」をめぐるアンビバレンスの強さが，U子の対人関係の問題と深く関連していることが浮かび上がってきたのである。

V男：高校の事務職に従事している30歳代後半の男性である。話が理屈っぽい，物忘れが激しいことを友人から指摘され，ある精神科を受診したところ，アスペルガー障碍を疑われて紹介されてきた。生育歴を聞くと，幼児期に両親は離婚し，母親に引き取られたが，５歳で母親は再婚した。そのころからおかしな行動が出現したらしいが，詳細はわからない。当時は落ち着きがなく，いたずらや他人に迷惑のかかる行為が多かった。小学生のころから普通ではなかったともいう。いまの仕事で自分はとくに困ることはないが，職場でトラブルはあるらしい。たとえば，学外講師に対して本来支払うべき講師料を，そんな価値はないからとの自分の勝手な判断で支払わなかったことがある。そのほかにもこだわる傾向があるともいう。このような話を聞いていると，たしかになんらかの発達障碍が疑われたことは想像できた。

ただ，筆者が面接をしていて，もっとも気になったのは，V男がことば遣いに非常に厳格で，いたく字義に拘泥することであった。筆者の発言の枝葉に逐一反応して言い直させようとするし，V男が何かを話そうとすると細部にとらわれて一向に要点がつかめない。まさに紹介医の指摘「木を見て，森を見ず」のとおりであった。

さらに印象深いのは，他者に対する強い警戒的な構えと用心深さであった。そこで筆者は，「人に会うとき，つい構えてしまいやすいことはないですか」と尋ねてみた。すると予想に反して，人に会うと，最初がとくにそうですね，と素直にその点を認めるとともに，そのときなんとなくほっとしたように，V男の表情が緩んだのである。筆者はV男の恐ろしいまでの形相から，被害的に反応して攻撃的言辞が返ってくるのではないかと内心危惧していただけに，この反応にはいい意味で驚かされた。幼児期の母性愛剝奪（虐待的な環境で育つことによって母親から望ましい養育を受けることができなかったこと）を体験したことによって，このような用心深い態度が生まれたのも当然ではないかと思われた。そこで筆者は，この強い緊張と警戒心を緩めるために薬物療法もよいのではないか，信頼できる人とのつながりがもてたら，いまのつらさも多少なりとも楽になるのではなかろうかと助言したところ，納得して帰っていった。

成人の発達障碍

成人になって発達障碍ではないかとの相談で受診する例は，いまではさほど稀ではなくなっている。その主な相談内容は，２つの事例からもわかるように，日常の対人関係に関する問題である。なぜか対人関係がスムーズにいかず，しだいに関係はこじれてさまざまなトラブルを生み，ついには職場で不適応状態となり，最悪の場合は退職を余儀なくされる。こうした場合，場の雰囲気が読めない，コミュニケーションがとれない，などの問題が目立つために，アスペルガー障碍の成人版ではないかとの議論が盛んに行われている。

ここで一般に使われている「発達障碍」という用語は，脳機能障碍を基盤にもち，成長過程でその障碍がさまざまな形で顕在化するものという意味を含んだものである。

対人関係の問題の背景にあるもの

上記で取り上げた２例について，成人の発達障碍か否かを筆者はここで論じようとは思わない。発達障碍と診断するかどうかには関係なく，患者自身の対人関係の問題がどのようにして生まれてきたのか，その成り立ちを考えることによって，患者に対してなにがしかの援助や手だてを生みだすことが重要だと思うからである。

２事例とも乳幼児期の親子関係に深刻な問題を抱えていたことから，患者は本来の「甘え」を享受することが困難であったことは容易に推測される。そのため，その後の成長過程でも対人接触に

対して回避的な態度を強めていったのであろう。回避的態度は患者の対人接触にまつわる不安を一次的に軽減する役割を果たすが，それと同時に，対人関係のなかでしか得られない安心感を得ることは，ますます困難になるという負の循環を生む。そこには強いジレンマが生まれるためにアンビバレンスが増強し，負の循環が肥大化していくのである。

２人の対人関係の特徴をそのように理解すると，２人の内面に潜在化している「甘え」について，面接のなかで取り上げていくことが求められることになる。

このように発達障碍が疑われる成人例に対して，関係の問題，それも「甘え」にまつわる問題としてみていくことによって，彼らの病態の成り立ちを理解する道が拓けるのではないかと思われるのである。

ある摂食障碍の成人女性との面接でみられたアンビバレンス

W子：20歳代前半のOLである。主訴は拒食，過食と嘔吐。典型的な摂食障碍である。中学生のころから交友関係で悩むようになり，うまくゆかず，仲間はずれにされた。それがきっかけで拒食が始まった。以後，拒食と過食を繰り返し，高校２年のころから治療に通うようになり，３年のときは比較的落ち着いていた。しかし，大学でも同じように交友関係でトラブルを起こし，再び拒食と過食を繰り返すようになった。どうにか卒業後，OLとして就職はしたものの，相変わらず対人関係で苦労し，体重調整のために下剤を乱用するまでになった。大学病院や近医をドクターショッピングするなかで，筆者のところに受診となった。

清楚な印象を与える女性で，人当たりもよく，話し方にもそつがない。時折笑顔さえ浮かべていて，病気で受診した患者とはとても思えないほどであった。インターネットを駆使して得たという摂食障碍についての知識も豊富で，一見物わかりのよさを感じさせた。

W子の核心的問題である人間関係について話題を向けると，「割とうまくやっていけてない」という，奇妙で微妙なニュアンスを含んだ言い回しが印象に残った。話のなかで，好きな人と（嫌いな人とは言わないで）苦手な人がいる。早い段階で無意識に区別してしまう。波長が合うとよく話す。合わない人とも話すが，（自分の負の感情が）どうも相手に伝わっているのかなと思う，と人間関係にいたく気を使い，とくに嫌われることを極力避けていることが印象に残った。会社の上司からは「バリアを張っている」と言われたこともあるらしい。患者は負の感情を表に表わすことを極力回避しているが，そもそも負の感情それ自体をしっかり体験したことが乏しいのではないかと筆者には感じられた。

面接も終わりに差しかかったので，筆者は患者の苦しみである拒食と過食について，「食事をめぐって苦しんでいるのですね」とW子の苦しみに同情の念を示したところ，驚いたことに，「いえ，調子のよいときもあります。時期によっては」と，いつも苦しんでいるのではなく，調子がよいときもあるのだと即座に反応した。W子は苦しいのでなんとか楽になりたいとの思いで受診したのであろうが，いざ面接で筆者がW子の気持ちに近づき，その苦しみを受け止めようとすると，途端に回避的な行動に出たのである。ここにみられるW子のこころの動きはまさにアンビバレンスそのものを端的に示しているといってよい。困っているから他者に頼るという，本来の「甘える」行動がとれないのである。そのことを指摘すると，W子は初めてそのようなことを指摘されたと，驚きの気持ちを語ったのが印象的であった。

関係が深まることを思わず回避する

人間は「甘え」の体験によって，他者に接近し，深く交わることが心地よいものであることを学ぶが，乳幼児期から「甘え」を享受することに対して阻害的にはたらくようなさまざまな体験を余儀なくされて育つと，本来であればもっとも心地よいはずの他者との深いつながりが，その人にとっては不快な思いを引き起こすために，そのような関係を思わず回避しやすい。筆者がW子の思いに対してこちらの気持ちを近づけた途端に，思わずW子は回避的反応を示している。このような反応を引き起こしたのは，W子自身も気づかない「甘え」のアンビバレンスゆえではないかと思われる。

乳幼児期の回避的反応と成人期の対人関係のパターン

前回（第20回）取り上げた13歳のS男との面接でも，W子とほぼ同様の反応を認めている。筆者がなぜこのような些細ともとれる面接での反応を取り上げるかというと，実は乳幼児期早期にその原型とも思われる反応を多くの事例で認めてきたからである。

本連載では乳幼児例をいくつか取り上げたが，そこで子どもは

母親と離れていると心細い様子をみせるにもかかわらず，いざ母親が接近したり，抱っこしようとすると，すぐさま回避的反応が生まれている。それは反射的とも思えるほどの反応であって，子どもが自分の意思で起こした行動とは思えない。このような母子関係のなかで体験してきた回避的反応という対人関係のあり方が，成人になった際に，面接場面で顕在化しているのである。

コミュニケーションがうまくできないと悩むある成人男性

X男：30歳代前半の男性。妻と生後まもない子どもの３人家族。親の代を引き継ぐかたちで自営業を営んでいる。いまでは店を広げて３店舗を経営するまでに成長している。

X男の悩みは，客とのコミュニケーションがうまくゆかない，世間話がむずかしい，マニュアル対応はできるけれど，その場で臨機応変に対応することができないということであった。そのため，仕事のことが頭から離れず不眠がちだともいう。いまの自分がどういう状態か知りたいとの動機での受診である。

最近のニュースで，発達障碍（アスペルガー障碍）の大人が冤罪のため裁判沙汰となったことを知って，自分のことと重なった。そこではことばの裏の意味がわからず，コミュニケーションがとれないことを知って，自分もそうではないか，実際はどうなのかを知りたくなって受診したというのである。

複数の店舗を経営しているので，スタッフをたくさん雇っているが，彼らとの関係がうまくゆかない。仕事の腕には自信があるが，接客に自信がないので，仕方なく裏方に引っ込み，経営にのみ参画している。人を雇用することが難しい時代なので，人使いには人一倍気を使っている。彼らと折り合いをつけることが難しく，気苦労が絶えないらしい。

日頃の対人関係の悩み

日頃の対人関係を振り返って次のように語り始めた。自分の言い方はきつくないが，はっきりとは物を言うほうである。そのために相手が傷つきやすいのかもしれない。相手から不満を言われやすいのはそのためではないかと思っている。最近，あるスタッフから経営システムとして一つの新しいやり方を提案された。提案したスタッフは自分でやりたいとも主張し始めた。経営者としてはスタッフのみにやらせるわけにはいかない。自分が経営者だから自分が中心となってやらなければと思っている。しかし，スタッフはあくまで自分でやりたいと主張する。こちらとしては言うべきことは言っているが，なかなか話がうまくすすまないので困っている。

さらにX男は日ごろから人と会話をしていて強く思っていることがあると言って，以下のように語った。いまの時代は単に技術だけで勝負することはむずかしく，客は店のホスピタリティも求めている。しかし，自分はなぜか雑談などのたわいもない話はしたくないという気持ちが強い。でもその一方で，そんなたわいもない話ができない自分に悩んでいる。だから，昨今の客のニーズに応えられない自分は接客業に向いていないように思うという。

X男の対人関係の悩みの中心には，気楽な気持ちで何げない会話ができないところにあるが，それは情緒的なかかわりあいが難しいということである。どうしても遊びのない対話となってしまいやすい。そのことが，ことさら相手との関係を対立的なものにしやすいのではないかと思われたのである。

対人関係の悩みの背景にある学童期，思春期の体験

面接の後半，筆者はX男の子ども時代について尋ねていった。するとさっそく，昔のことで真っ先に思い出すのは次のようなことだと語り始めた。小学校４，５年ころ，友達と一緒に学校から帰るとき，自分から話さなければと思いつつ，それができないで黙って帰っていたことを思い出す。今日までずっとそんな気持ちが続いている。これは自分が他人に認めてもらっていないという思いと関係があるかもしれないとも感じているというのである。

そこで両親との関係を尋ねていくと，両親は２人ともいまも店舗に顔を出して働いているので，時間をともに過ごすことが多い。いまでも自分は両親に迷惑をかけてはいけないという思いがことのほか強い。その例として，若いころ修行のためにほかの店で腕を磨いていた際，よく親からいろいろな物を送ってもらっていたが，自分が頼んでいない物に対しては，つっぱねて返したり，拒否したりしていたというのである。

幼児期の「甘え」にまつわる体験

さらに幼児期に話題は移っていった。生まれてから３歳になるまで，両親は共働きをしていた。生後数カ月から半年までの間，

新幹線で2時間ほどもかかる伯父(父親の兄)の家に預けられていた。両親は店の仕事が忙しくて子どもの面倒がみられないという理由からだったというが，それ以上詳しいことは語らなかった。小学校に入ってからも4年生になるまで何度か同じことを体験したという。

ふと3歳時のことを思い出したという。砂場で友達と遊んでいたとき，伯父さんに何かでちょっかいを出したらひどく怒られたことがある。しかしなぜ怒られたのかは思い出せないともいう。

このように，X男は面接のなかでしだいに学童期から思春期，さらには乳幼児期へと過去に遡って記憶が想起されていった。初回面接であったがゆえに，なぜ両親が子どもを親戚とはいえ遠方に預けてしまったのか，単に仕事が多忙ゆえとはとても思えない。よほど何か特別な事情があったであろうことが推測されるのである。

X男は妻子持ちで，子どもは乳飲み子，それもX男自身が親戚に預けられた時期に相当する。このこともX男に当時の体験を想起させやすくしているのであろう。

患者との面接で強く感じたこと

X男の面接での印象は，おどおどした感じはまったくみられず，もの静かで落ち着いた男性である。体格もしっかりしていて，見るからに頼もしい感じを受ける。話し方にもそつがない。こちらの質問にも誠実に考えて一言一言丁寧に話す。内省的で素直。こちらも安心して感じたことを話すことができる。

しかし，ユーモアやゆとりはなく，いつもまじめな話し方で，腰が据わっているというよりも，重い空気を周囲に伝えるので，生真面目な雰囲気になりやすいのであろう。相手はX男に対して，ある種の怖さを感じとっているかもしれない。その結果，相手は多少なりとも警戒的になることもあるだろうと思われた。

「甘え」のアンビバレンスと「拗ねる」

複雑な事情で乳幼児期に「甘え」体験を享受できなかったX男であるが，その後の成長過程で，彼に「甘え」のアンビバレンスと思われる一面がとてもわかりやすく顕在化しているのは，思春期・青年期にとった両親に対する態度である。「…よく親からいろいろな物を送ってもらっていたが，自分が頼んでいない物に対しては，つっぱねて返したり，拒否したりしていた」というのである。

X男が両親に対してとったこのような態度は，子どもであれば「拗ねている」と思わず言いたくなるような反応である。両親の気遣いに対してことさら拒否しようとするところに，彼の「甘え」の気持ちをみてとることができるのではないか。

このようなことを指摘すると，親に対して素直になれない自分に気づいていった。反抗心がいまなお続いているのは，親が自分の存在を認めてくれていないという思いが強いからだともいうまでになった。

X男は両親に対する「甘え」を否認し，強がってはいるが，内心はとても心細いのであろう。ゆとりがなく，遊びのないハンドルで運転をしているような状態といってもよい。アンビバレンスが強いために，気負いがちになり，他者との関係はどことなく対立的になるのであろう。周囲の人たちが思わず警戒的な構えを示しやすいのも，そのようなことが関係しているのではないか。

筆者はX男にこのような内容を話していった。するとX男はいたく納得して，自分の両親に対する思いを省みることができたのである。非常に満足し，今回の面接のみで治療は終了となった。

「甘え」のアンビバレンスが成人期に顕在化する

本来の「甘え」体験は，乳幼児期早期に体験するもので，本人も意識したり想起したりすることのできない非言語的・非反省的なものである。しかし，何らかの家庭の事情によって本来の「甘え」の体験を十分に享受できなかった人では，屈折した「甘え」がさまざまなかたちで顔を出すことになる。「拗ねる」「むくれる」「ぐずる」「ひがむ」「いじける」などといわれるような行動や態度は，まさにそのことをさしている。屈折した「甘え」は第三者にはとても目につきやすく，そのため「甘え」そのものを否定的にとらえやすいが，そこでの「甘え」は本来の「甘え」ではなく，屈折した「甘え」，つまりは本来の「甘え」を享受できなかったがゆえの「甘え」のアンビバレンスの具体的な姿なのである。面接で治療者に求められるのは，そうしたアンビバレンスをその場で取り上げ，自らの「甘え」の問題について当事者が気づくことができるように援助することである。そうすれば，たとえ過去の不幸な体験があったとしても，それを乗り越える強さが生まれることが期待されるのである。

最後に，ちょうど丸2年お付き合いいただいた読者諸氏にお礼を申し上げる。「関係をみる」ということの一端を多少なりともご理解いただけたならば筆者にとって大きな喜びである。